経済論叢（京都大学）第183巻第1号，2009年1月

トマス・リードの生涯とスコットランド啓蒙

田　中　秀　夫

Ⅰ．はじめに

トマス・リード（Thomas Reid, 1710–1796）は「コモン・センス学派」の創始者として知られている。コモン・センス学派は，ヒュームの懐疑論，スミスの感情論に対抗し，万人のコモン・センスに認識の基礎を求める見解を特徴とする学派であって，18世紀末から19世紀にかけて英米を中心とする広い範囲において影響力を持っていた。ヒュームやスミスほど著名ではないものの，リードは，スコットランド啓蒙思想家として，おそらくは『市民社会史論』で知られるアダム・ファーガスンに次ぐ知名度の思想家である。その地位は法曹啓蒙知識人ケイムズ卿や法学教授ジョン・ミラー，歴史家ロバートスンとほぼ同じ程度であるといえば，過小評価であろうか。

リードは，1764年に，アダム・スミスのグラスゴウ大学の道徳哲学講座を引き継いだ。リードは，長老派のなかの「穏健派」に属する牧師・哲学者であったし，「福音派」とは違って，啓蒙派に属していたことは明らかである。しかし，スコットランド啓蒙にも小さな内部の対立傾向はあり，リードは思想史的にはケイムズ卿と協力して，今述べたように，ヒュームの懐疑論，主観的な「信念」の概念に依拠した認識論を論駁する直覚主義的な「コモン・センス」哲学を展開した。自身もまた人民派から攻撃を受けることになったケイムズではあったが，皮肉にも，ヒュームの庇護者とはならず，あるいはヒュームとの間に距離を置いただけではなく，リードと組んで，その批判者となった。ケイムズがそうなった理由は，いくらかは，ハチスンやウォレスの同世代であったケイムズの時代経験の差異に帰すべきかもしれない。1740年代から50年代にかけて，思想的にはケイムズとヒュームは近い陣営に属し，福音主義的傾向を強めていた人民派と対立していたはずなのに，である。

またリードは，ドゥゴールド・ステュアート（以下D・ステュアート）をはじめとする優秀な弟子を育てた。ニュージャージー・カレッジ（後のプリンストン大学）の学長に迎えられたウィザスプーンは，リードの直弟子ではなかったが，リードの影響を受けてアメリカにコモン・センス哲学を伝えた。さらに19世紀前半におけるD・ステュアートの影響力は大きく，リードの哲学はD・ステュアートの影響力等を通じてアメリカにいっそう普及したし，またフランスにも伝わった。

こうして，ジェイムズ・マコッシュ[1]などの研究の影響もあって，スコットランド哲学と言うと，リードが始めた「コモン・センス」哲学を意味することになり，今なおそうである。わが国では「常識哲学」と訳されることが多いが，コモン・センスはむしろ「共通感覚」と訳すほうがよいかもしれない。語源的にはアリストテレスの共通感覚（sensus communis）に由来するからである。

リードはヒュームの「人間の科学」の経験的手法に学んでもいるから，以上のような通説はリードという思想家の仕事を過度に単純化して

1）McCosh, J., *The Scottish Philosophy*, London, 1875.

いる。リードとヒュームの関係はもっと複雑であるし，スミスとの関係でも，案外複雑な要素があるように思われる。従来，周知のように，『道徳感情論』の改訂問題とリードの関係が問題になってきた[2)]。前述のように，リードはスミスの道徳哲学講座を引き継いだのであるが，講座継承人事をめぐる騒動は別としても，スミスは多様な講義を行っていたし，スミスの講義とリードの講義の関係も必ずしもはっきりしていない。またコモン・センス学派がなぜ1785年以降スコットランドでも有力となり，19世紀に大きな影響を及ぼしたのかというもっと大きい疑問もある。いな，そもそもリードのコモン・センス哲学は，ハチスンやヒューム，スミスの道徳哲学や認識論，倫理学と比べて，それに匹敵するほどの優れた哲学なのかどうなのかが，疑問であるように思われる。

とはいうものの，最近のリード研究は相当に盛んで，スミスやヒュームほどではないとしても，ハチスンやD・ステュアート研究に比べて格段に活発である。それはなぜなのだろうか。リードが自然哲学や数学に優れた理解を持っていたといったことは新知識かもしれないが，思想史を書き換えるほどの画期的な発見でもない。またそれ以外にリード哲学の画期的な意義が発見されたというような事件があったわけでもない。にもかかわらず，リード研究が盛んなのは，アバディーン大学の研究戦略を含めて，おそらくスコットランド啓蒙研究がますます進んできて，その結果，膨大に残されているリードの未刊行資料に光が当てられる段階に達してきたということであろう。リード・プロジェクトはリードの著作を草稿も含めて逐次出版する企画であり，アバディーン大学を拠点として，エディンバラ大学出版部が協力し，ホーコンセン，ポール・ウッドなど幾人もの研究者が尽力している。言い換えれば，スコットランド啓蒙研究という「通常科学」のプロジェクトの営みは，多数のトピックにおいてますます詳細に展開されているのだが，その一つの焦点としてアバディーンへと関心が向かっているということなのであろう。

わが国にも，スミスとの関連で，ケイムズとリードの常識哲学の展開と，スミスの応答を解明した篠原久の先駆的な研究をはじめとして，いくらかの研究がある[3)]。しかし，研究の蓄積は乏しく，未だ不十分な段階にある。

本稿はまず思想家としてのリードの生涯の輪郭を描き，スコットランド啓蒙のなかに位置づけることから始めたい。ここではホーコンセンの調査に多く依拠しており，その適否を検証することはできていないことをお断りしておきたい。続いて，リードの『実践倫理学』の分析を遂行したいと思っている。

スコットランド教会の牧師から1751年にアバディーン大学のリージェント（クラス担任教師）に転身したリードは，1764年にアダム・スミスの道徳哲学講座の後継者としてグラスゴウ大学に招聘された。リードがスミスの推す候補を破って採用されたのには，ケイムズ卿などの力添えがあった。官職任命権は1761年に他界するまで第3代アーガイル公爵が握っていたが，それ以後は公爵の甥であるマウント・ステュアート，ビュート卿が握っており，その信頼の厚い腹心の法曹，政治家としても有能であったミルトン卿と彼の盟友であったケイムズの影響力は大きかったものと思われる。

スコットランドの大学・アカデミーでの道徳哲学の流れは，大体のところ，ストア・キリスト教の刻印を帯びた，グロティウスとプーフェンドルフに始まる近代自然法思想，すなわちプ

2）篠原久『アダム・スミスと常識哲学』有斐閣，1986年。

3）篠原，同上書。長尾伸一『ニュートン主義とスコットランド啓蒙』名古屋大学出版会，2001年。

ロテスタント自然法を基調としているという点で，大きな共通性を持っていた。また長老派のなかの新しい勢力である穏健派を含むウィッグの一派がアーガイル派としてスコットランドの公共世界全般において影響を及ぼしつつあり，改革精神，改良精神が農業に留まらず社会の全般に浸透していったことも重要である。こうして，とりわけ合邦（1707 年）後，社会が全般的に激しく変容を遂げつつあったことがおそらくは影響して，道徳哲学においても変化が生じ，主知主義的な傾向と主意主義的な傾向の対立をはじめとして，感情論か合理論か，懐疑論か敬虔主義か，自愛心重視か仁愛重視か，快楽主義か禁欲主義か，などいくつもの対立が生じるようになっていた。その思想傾向に，グラスゴウとエディンバラ，アバディーンの差異というものも存在した。セント・アンドルーズは，大学を持ってはいたが，ノックス率いる革命的な盟約者の運動の後遺症が大きく，いまや衰退の一途を辿っており，影響力は小さかった。そうした対立と差異が講壇にも反響したが，しかしその対立と差異は，大きな啓蒙の本流，枠内のなかの対立であった。

スコットランドには世紀前半まで神授権説を擁するステュアート家の正統性を信奉するジャコバイトという旧勢力もあったが，おそらくは 1715 年以降，彼らは大学の道徳哲学講座にはもはや影響力はなかった。合邦による名誉革命体制，均衡国制への参加，大ブリテンの成立がスコットランドの運命の方向と枠組を決定した。ジャコバイトの巻き返しはイングランドの名誉革命政権を敵とする以上，成功の見込みはなかった。

1720 年代には，第 2 代アーガイル公爵に代わって，その弟の第 3 代アーガイル公爵，アイレイ伯がウォルポールの盟友となって，事実上の統治者，スコットランド担当大臣として君臨し，イングランドの文明社会 civilized society，社交性 sociability，ウォルポールの商業社会化 commercialization 路線をスコットランドにおいて強力に推進する。彼の恩顧・官職授与権を通じて，穏健派，自由主義者が優遇され，意欲と才能に恵まれた若者が教会と大学とスコットランドの統治機構に送り込まれた。グラスゴウから遥かに北に上ったインヴァラリーに居城を構え，西部ハイランドの広大な領地を富と権力の地盤としたアーガイル公爵は，スコットランド全土に影響力を及ぼしつつあり，改良運動の推進者としてスコットランド王立銀行（Royal Bank of Scotland）や英国亜麻会社（British Linen Company）の設立にも積極的に関与した。

コモン・センス哲学は，長老派牧師であり，ラディカル・ウィッグでもあったグラスゴウ大学教授フランシス・ハチスン[4] の「モラル・センス」の概念に依拠した道徳哲学から発展した哲学であるから，スコットランド啓蒙のなかに確固たる地位を持つ。とはいうものの，カーマイケルに先駆を持ち，ハチスンを経て，スミスにおいて本格的に確立し，その後はミラーへと受け継がれるグラスゴウ大学の自由主義の伝統を啓蒙の本流とすれば，この本流はいくぶん改革的・急進的傾向，共和主義的傾向を持っており，同じく自由主義陣営に属するとしてもリードたちのコモン・センスの思想はより神学的，保守的側面が強かったと見るべきであろう。

リードは哲学三部作で著名であるが，膨大な草稿を残した思想家でもあった。三部作とは，『人間精神の研究』［1764］[5]，『人間の能動的力能論』［1785］，『人間の知的力能論』［1788］である。三部作のうち後の二著が主著とされることが一般的である。リードの著作としては，それ以外に今では草稿を編集して『哲学的弁論』

4）Robbins, C., *The Eighteenth-Century Commonwealthman*, Harvard, 1959 を参照。

5）本書は邦訳されている。朝広謙次郎訳『心の哲学』知泉書館，2004 年。これは第 4 版の訳である。

［1987］と『実践倫理学』［1990］が刊行されている。さらに新著作集が刊行され始め，『書簡集』も出ており，草稿研究も進んできたから，その実物大のリードに迫ることが以前より可能となってきた。

リードをヒュームの懐疑論に対決しそれを論駁しようとしたコモン・センス学派の哲学者として位置づけたのは，リードの弟子のD・ステュアートであった。それが一つの課題であったことは疑いを容れないが，しかしながら，ノートンや篠原久，ポール・ウッド，ホーコンセンの研究によって，そのような見解はあまりに焦点を絞りすぎた偏狭で不十分な見解であることが明らかにされてきた。

ノートンは，ハチスンからバトラー，ターンブル，ヒューム，ケイムズと展開されるシャーフツベリのモラル・センスの伝統からコモン・センス理論が発展したという継承関係を主張した[6]。篠原は，ケイムズ，リードとスミスの人間論と道徳哲学，実践倫理学における密かな論争を浮かび上がらせた。またウッドはとくに自然哲学者としてのリードに光を当て，ホーコンセンはリードの実践倫理学を発掘し，テクストを編集して刊行した。そうした研究を参照して，まずリードの生涯を振り返ることから始めよう。[7]

Ⅱ．リードの生涯と経歴：前半生

リードは1710年4月27日（『リード書簡集』でウッドは26日としている）に，キンカーディンシャーのストローン（Strachan）の長老派牧師の息子として生まれた。デイヴィッド・ヒュームは1711年生まれであるから，ほぼ同じ世代である。父方は代々聖職者で，母方は数学者，科学者として有名なグレゴリ家に関係があった。母マーガレットの長兄，デイヴィッド・グレゴリはニュートンの親友で，エディンバラ大学の数学教授（1683-90）からオックスフォード大学の天文学教授に転じた。エディンバラ大学の数学の後任には弟のジェイムズが就任した。ニュートン哲学のスコットランドへの導入は，グレゴリ家の数学者が担った。

リードは，キンカーディンの教区学校とアバディーンのグラマー・スクールを経て，1722年に12歳でアバディーンのマーシャル・カレッジに進んだ。彼は，まず4年の教養課程に入り，1726年からは同カレッジで神学を学んだ。コリン・マクローリン（数学教授），トマス・ブラックウェル（ギリシア語教授），ジョージ・ターンブル（リージェント，哲学教授）から教わった。

1731年に学業を終えたリードは，説教師の資格を得て，父と同じくスコットランド教会の牧師となったが，1733年から36年にかけてはマーシャル・カレッジの図書館員となった。1730年にウィリアム・ダンカンがマーシャル・カレッジに入り，35年に卒業しており，二人は知り合ったと思われる。ダンカンの『論理学綱要』［1748年］はリードの論理学に影響を与えたと思われるが，それは後のことである[8]。1736年に辞職して，リードは親友ジョン・ス

6）Norton, D. F., David Hume, *Common-Sense Moralist, Sceptical Metaphysician*, Princeton University Press, 1982.

7）以下の叙述にあたっては，ポール・ウッドの研究に依拠したホーコンセンの研究を主に参照し，その他の関連文献で補足する。ホーコンセンの研究とは，Haakonssen, K,. “Introduction” to his ed. Thomas Reid, *Practical Ethics*, Princeton University Press, 1990, pp. 3-96である。以下，Haakonssenとのみ略記する。学問的な伝記はウッドに始まる。Paul Wood, “Thomas Reid, Natural Philosopher”, Ph. D. dissertation, University of Leeds, 1984. 本稿ではウッドの学位論文は利用できなかったが，『書簡集』は冒頭の年表を含めて利用できた。*The Correspondence of Thomas Reid*, ed, by Wood, P., Edinburgh University Press and Pennsylvania State University Press, 2002.

テュアート（後にマーシャル・カレッジの数学教授）とともにイングランド旅行を行って，ケンブリッジ，ロンドン，オックスフォードを訪問した。オックスフォードでは従兄弟のデイヴィッド・グレゴリ（同大学初代近代史教授）に会い，盲目の数学者サウンダスン（Nicholas Saunderson）とも会見した。

1737 年に 27 歳になったリードは帰郷し，キングズ・カレッジからアバディーンのニュー・マーカー（New Machar）の牧師職を与えられた。同地へ赴任したリードは，牧師任命権法と穏健派に反対していた，福音派の影響を受けた教区民によって，池に投げ込まれた。最初の説教の時には，叔父が剣を抜いて，リードを保護したらしい[9]。こうした騒動があったものの，リードは，早くも 1738 年 5 月にはエディンバラでのスコットランド教会の総会に出席している。1740 年には，従妹のエリザベス・リードと結婚した。リードは教区牧師を 14 年間務めた。リードの誠実さが理解され，妻エリザベスも教区民に信望が厚く，彼らは敬愛された模様である。

リードは，1741 年以降は 1747 年まで隔年でスコットランド教会の総会に出席している。そしてリードは 1751 年にアバディーンのキングズ・カレッジからリージェント（教室担任）として迎えられた。13 歳ほど後輩のアダム・スミスがケイムズ卿などの推挙でグラスゴウ大学の教授となったのも，同じ 1751 年であったから，当時としては遅い就任である。

リードの前半生は資料が乏しくよく分からない。しかし，年齢で少し下の「エディンバラの穏健派」世代と似ていたのではないかと，ホーコンセンは言う[10]。アバディーン出身ではあったが，リードは，ウィッグ長老派であって，ジャコバイトでも監督派でもなかった。彼の知的・道徳的見解は，穏健派と類似した大学教育の影響を決定的に受けていた。ウィリアム・カーステアズの指導のもと，1708 年に専門教授制に移行したエディンバラ大学と違って，マーシャル・カレッジはクラス持ち上がりの担任制度（regent system）を未だ維持しており，リードは，初年度はギリシア，ラテン，ヘブライ語の専門教授から教わったものの，二年目からは一人の教員からすべての学科，すなわち論理学，自然哲学史，倫理学，形而上学，および個々の科学を学んだ。最初の二年間は数学教授が代数と幾何の入門を教えた。したがって，エディンバラに改革は遅れていたが，しかし 1715 年のジャコバイトの反乱の支持者，賛同者と思われる教員が追放され，新任教師が就任したために，リードが入学した時には，知的な変化があった。

1．ジョージ・ターンブル

新任の若い教師のなかで最も重要だったのはジョージ・ターンブル（George Turnbull）である。1723 年から 26 年にかけて彼はリージェントとしてリードを教えた。最終年の最初の数ヶ月，ターンブルは休講し，オランダのフロニンヘン（Groningen）に渡り，グロティウス亡き後の代表的な自然法学者として著名なユグノーのジャン・バルベイラック（Jean Barbeyrac）のもとで共同研究をした。ターンブルはバルベイラックから多くを学んだであろうが，研究が乏しく明らかになっているわけではない。その間，教室は，バルベイラックの弟子であったロバート・ダンカン（Robert Duncan）が教えたようである[11]。したがって，２年半の間，13 歳から 15 歳にかけての時期にリードはターンブルという優秀な教師に始終顔をつき合わせて教

8）*Thomas Reid on Logic, Rhetoric and the Fine Arts*, ed, by Broadie, A., The Pennsylvania University Press, 2004, Introduction, pp. xx-xxi.

9）篠原，前掲書，202 ページ。

10）Haakonssen, *op. cit.*, p. 6.

11）Haakonssen, p. 7.

わったのである。しかし，10歳代半ばまでの学習がいかほどのものたりうるかを考えると，この時期のターンブルの影響をあまり過大に考えるのも疑問であろう。

ターンブルの教義はこの時代のスコットランドで広く浸透しつつあった「摂理的自然主義」（providential naturalism）である。それはイングランドでも広まりつつあった自然宗教と類似した傾向のものであった。この世界の現象を科学的に分析すれば，規則性が見つかり，神の手が示される。その最も完全な例はニュートン物理学であり，その方法は自然現象から道徳現象に拡張できる。自然哲学は道徳哲学を導き，後者は自然神学で完成した。最高の意志は人間を自然法に従う道徳的義務のもとに置いた。

ホーコンセンによれば，神に基礎を置く自然法学をターンブルは学生に教えた。倫理学における主意主義と実在論の論争を含む，当時の自然法の主要争点へとリードは導かれたであろう。道徳法が教義で祀り上げられた宗教から独立に得られるとすれば，聖職者の権威は正当性を失うし，説教師の役割は道徳の教師のそれとなる。独立した道徳的性格が教養教育で形成される。これは市民の徳の基礎となるとともに，自由な政治制度の基礎ともなる[12]。

1724年までにデイヴィッド・ヴァーナー（David Verner）によってシャーフツベリの思想がアバディーンにもたらされていたし，ターンブルはアイルランドのウィッグ・コモンウェルスマンのロバート・モールズワース（Robert Molesworth）と文通していた。1728年に数学者コリン・マクローリン（Colin Maclaurin）は，ダブリンのモールズワース・サークルに加わっていたハチスンと接触があった[13]。彼らは，どの程度までコミットしたかはともかくとして，啓蒙とウィッグの自由主義，コモンウェルスの思想，穏健主義，社交性，洗練などの新しい潮流に触れていたと言えよう。このように，彼らは伝統的なスコットランドの長老派の禁欲的カルヴィニズムから離れつつあった。

こうした事情を勘案すれば，ホーコンセンが指摘するように，リードがターンブルから学んだのは，摂理的自然主義に留まらず，近代自然法，シャーフツベリ的な洗練されたストア主義，共和主義的あるいは「コモンウェルス」的な傾向の人文主義などであったという推測が難くない[14]。アバディーンにおけるコモンウェルスの伝統とはキャロライン・ロビンズの主張でもあった[15]。これは1720年代末までのことであって，その後，30年代から40年代にかけてはよく分からない。けれどもホーコンセンはリードの草稿を調べていくつかの事実を指摘している。

1736年から翌年にかけて，アバディーン哲学協会で，リードは，人間本性の理論（ロックとハチスン），自由意志，自愛心と仁愛，情念（ハチスン理論），道徳的行為者の法による神の統治について報告した。また8ページの「クラーク博士の自由観の抜粋」が残されている。さらにまた1737年からの，ピーター・ブラウン（Peter Browne）の『人間知性論』（*The Procedure, Extent, and Limits of the Human Understanding*）のノートがある。そして1738年11月付のバトラー（Joseph Butler）の『宗教の類比』の20ページの抜粋もまた存在する。二人の道徳哲学の多くの類似点と，リードが生涯，バトラーを尊敬していたことを思えば，この綿密な読書がリードの思想形成に影響を与えたことは否定できない。

バトラーは摂理的自然主義を強化していた。道徳哲学の教えは道徳を教え込むことにあり，道徳理論の目的は道徳的懐疑論を食い止めるこ

12）Haakonssen, pp. 7–8.

13）Haakonssen, p. 8 note.

14）Haakonssen, p. 8.

15）Robbins, *op. cit.*, pp. 211–214.

とである。バトラーは道徳を私利に還元する道徳的懐疑論者（マンデヴィルのような）とそれを仁愛に還元するハチスンを批判した。道徳は複雑で，人間本性の内的原理の多様性を認識しなければならない。第一に，個々の情念，欲求，感情がある。第二に，一般的な愛情，自己愛の原理がある。第三に，仁愛の原理がある。第四に，良心があり，他の諸原理は良心の権威に服す。このバトラーの多元論がリードの能動的力能の階層性という把握に影響を与えたに違いないし，リードの道徳的能力という概念はバトラーの良心の観念にきわめて近い[16]。

リードの２年後にマーシャル・カレッジの教養と神学のコースに入ったリードの友人デイヴィッド・フォーダイス（David Fordyce）は，リードの紹介状を携えてロンドンに旅行をし，フィリップ・ドッドリッジ（Phillip Doddridge）のノーサンプトン・アカデミーを訪問した。ドッドリッジは当時のイングランドにあって最も有名な非国教徒牧師であった[17]。こうして1742年にマーシャル・カレッジの教員となったフォーダイスは自由主義的な長老派とイングランドの非国教徒との交流関係を深め，自らの『教育に関する対話』*Dialogues concerning Education*［1745］において共通の教育理念を展開した[18]。イングランドの非国教徒はスコットランドと同時にアメリカ植民地にも大きな影響を与え始めていたが，逆にスコットランドの大学からカリキュラムを学んで，自らの非国教徒学院の教育を発展させつつあった[19]。フランクリンはこのフォーダイスの教育論をハチスンの著作と勘違いしていた。

リードが1748年に王立協会に提出した「量に関する一論」は彼の最初の刊行物で，同年の報告集に出たが，ここでリードは「道徳問題に数学的計算を導入する」というハチスンの試みを批判した。それはハチスンの1738年以前の版の『美と徳の観念の起源の研究』にあったもので，それが批判の対象となっていた。ハチスンは1738年の第４版からこの数学的部分を削除しているが，リードの批判以前のことである[20]。

この時期のものとしては他に，おそらく1750年のものと思われるエピクテトスの読書ノートがあり，リードは古代ストア派に親しんでいた。ホーコンセンの指摘では，そのノートにはソクラテスの宗教に対するクセノフォンの擁護についてのノートが続いているが，そのことは18世紀にはソクラテスとストア派を結び付け，ともに合理的キリスト教の枠組に合致するものとする見解があったので，興味を引く[21]。

２．牧師としてのリード

牧師としてのリードは，信仰よりも道徳に傾斜した合理的キリスト教の説教を行った。リードはサミュエル・クラーク（Samuel Clarke），ジョン・ティロットスン（John Tillotson），非国教徒のジョン・エヴァンズ（John Evans）の説教を援用した。オホタタイアのラムジーは「北方の牧師の大多数は穏健派の初期からの屈強な支持者であった」と証言している。リードもまた，すでに述べたように，穏健派に属した。

16）Haakonssen, pp. 9–10. バトラーとリードの関係については Schneewind, *Sidgwick's Ethics and Victorian Moral Philosophy*, 1977, pp. 63–74.

17）ドッドリッジの著作が，ウィザスプーンが道徳哲学の講義を行ったニュージャージー大学（後プリンストン大学）の学生の読書リストに挙げられているのは，偶然ではない。Tait, L. G., *The Piety of John Witherspoon*, Geneva Press, Kentucky, 2001, p. 195, 196, 198.

18）Haakonssen, p. 11.

19）さしあたり，筆者の「辺境の啓蒙―スコットランド啓蒙のアメリカ啓蒙への影響」，『高知論叢』第88号，2007年３月を参照されたい。

20）Haakonssen, p. 11.

21）Haakonssen, pp. 11–12

キリスト教の道徳的・実践的側面を重視し，信仰において理性を援用し，教義の差異には寛容であったから，リードの見解は，ウィリアム・ハミルトン教授のもとエディンバラで教育を受けた穏健派の世代，パトリック・カミング（Patrick Cuming），ウィリアム・リーチマン（William Leechman），ジェイムズ・オズワルド（James Oswald），ロバート・ウォレス（Robert Wallace），ウィリアム・ウィシャート（William Wishart）と，ジョージ・ウィシャート（George Wishart）の見解に近かった[22]。

スコットランド教会はカルヴァンに始まり，ノックス，ブキャナン，そして急進的なカヴナンター（盟約者）の伝統をひく正統派，民衆派（人民派）の教会であり，民衆による自治，牧師任命権と禁欲主義を特徴としていた。しかしながら，17世紀以来の社会経済の発展によって，過度な禁欲主義は自由主義の挑戦を受け始めていた。やがて決定的な転換が訪れる。1712年の牧師任命制度の変革が転換点となり，1740年代の「穏健派宣言」が正統派からの実権の奪取，教会の改革を表現した。

1712年の牧師任命制度の変革（Patronage Act）によって，俗人のパトロンが牧師任命権を持つこととなったので，支配層の影響を通じて，教区での穏健派の影響力が増した。キングズ・カレッジが任命権を行使したことは民衆には不評であった。リードはニュー・マーカー（New Machar）で反感を持たれた。リードは「実践倫理学」に関心を持っていたが，しかし彼の最大の関心は道徳哲学にはなく，認識論，精神哲学，数学と天文学にあった[23]。

22）Wood, P., “Thomas Reid, Natural Philosopher”, Ph. D. dissertation, University of Leeds, pp. 47–48, cited in Haakonssen, p. 12.

23）Haakonssen, pp. 12–13.

3．キングズ・カレッジのリージェント（1751–1764）

1751年にリードはアレグザンダー・レイト（Alexander Rait）の後任となり，レイトのクラスの3年次を担当した。リードはすでに41歳になっていたから，当時としては遅いスタートである。それから1764年にグラスゴウ大学に移るまで，13年間すなわち，3クラスと2年，リージェント（持ち上がり制クラス担任教員）を務めた。アバディーンでのリードは多忙であった。大学の運営，行政，財政に関係し，時々はスコットランド教会総会に大学を代表して出席した（1758，1761，1763，1764年）。1763年と翌年の総会代表と共に，リードは「ハイランド・島嶼委員」となっている。またキングズ・カレッジの教育改革（カリキュラム改革，教授制度の導入？）にも携わった[24]。1754年にはアバディーンの名誉市民になった。

1758年には「アバディーン哲学協会」ができた。リードもその創立に貢献し，初代の事務局を担った。「賢人クラブ Wise club」とも呼ばれる協会には，親戚のジョン・グレゴリ（John Gregory），友人のニュートン・ジョン・ステュアート（Newton John Stewart），親友で医師のデイヴィッド・スキーン（David Skine），牧師のロバート・トレイル（Robert Trail），牧師で後のマーシャルの学長になる哲学者ジョージ・キャンベル（George Campbell）がいた。アレグザンダー・ジェラード（Alexander Gerrard）とジェイムズ・ビーティ（James Beattie）も加わった。協会でリードは多くの報告をした。

またリードは1758年創立の「ゴードン・ミル農業クラブ」（Gordon Mill Farming Club）に加入し，農業改良にも関わった。農業は後の彼の支援者，デスクフォード卿（Lord Deskford）とケイムズ卿とも共通の関心であった[25]。

24）Haakonssen, p. 13.

25）Haakonssen, pp. 13–14.

リードはアバディーンの地主，専門職と商業のエリートからなる名士となった。

Ⅲ．アバディーン時代のリード

アバディーンの13年間におけるリードの思想を物語る資料は乏しい。わずかに卒業講演（1753，1756，1759，1762年）と『人間精神の研究』[1764] からうかがい知ることができるに過ぎないが，リードの哲学的見解はほぼこの時期に形成されたと見られる。リードは，ギリシア語を別として，教養教育の全般を受け持ち，数学，自然史（誌），自然（実験）哲学，精神哲学とそれに基礎を置く諸科学を教えた[26]。

キングズ・カレッジのカリキュラム（リードは共著者）の説明によれば，「精神哲学とは，人間精神の仕組み，および感覚的，知的，道徳的な人間精神のすべての力と能力の仕組みの説明，人間精神の改善とその方法，心身の相互への影響，他の精神とくに至高の精神についての知識を扱う。そして精神哲学に基礎を置く科学とは，論理学，修辞学，自然法と万民法，政治学，経済学（Oekonomicks），美学・芸術，自然宗教である[27]。」

１．精神学あるいは精神科学

精神学（pneumatology）はリードの哲学の中核であった。それは諸学の基礎であり，方法はベーコンとニュートンの方法を包括する実験的・帰納的方法とされた。その方法は普遍性を持つ。その方法が示すところでは，自然界と精神界は法に支配されているけれども，同型的ではない。これが観念説とヒューム懐疑論を批判する立脚点となった。コモン・センスの第一原理はすべての認識とすべての科学の否定できない前提であるというリード独自の見解がここから生まれた。神学もまたその上に構築されることになる。

２．道徳学あるいは道徳科学

精神科学を基礎とし，それに立脚する道徳科学がどのようなものであるか，この時期のリードの見解は定かではない。講演には自然法学者への言及はないし，リードが自然法学に関心を持っていたという証拠はない。経済学もはっきりしないが，ホーコンセンによれば，手がかりはクセノフォンの『オイコノミカ』*Oikonomika* にある。リードは1750年にノートをとっており，またグラスゴウに移ってから「家政の法学」に「経済法学」oeconomical jurisprudence という名称を使った。オイコノミックスとは経済学ではなく家政学であった[28]。しかし，リードの経済法学とは家政学でもなく，家族法のことである。

卒業講演から推定すれば，アバディーン時代の道徳の講義は道徳的知識の基本原理と徳と義務の古典的な観念，および政治学を内容とした。道徳は公理であり，コモン・センスの問題であって，論証問題ではない。「古代であれ近代であれ，人類一般のコモン・センスを超えて，徳の原因，起源，本質について哲学的思索を試みた著者はほとんど進歩しなかった。」リードはクセノフォンの語るソクラテスとキケロの『義務論』を重視した。

政治学ではリードは共和主義，ユートピア，国制論（立憲主義）に関係する著者に言及している。ヒュームの政治学についてのリードの見解は分からないが，リードは政治学を手段，技術の学として捉えていた。モンテスキューは英国国制論の大家として登場していて，リードのユートピア的な傾向にとって歯止めとなっ

26）Haakonssen, pp. 14-15. リードの数学や自然科学については，長尾伸一『トマス・リード　実在論・幾何学・ユートピア』名古屋大学出版会，2004年に紹介がある。

27）Haakonssen, p. 15.

28）Haakonssen, pp. 15-16.

た[29]。

「ソクラテス学派の主要な人物，クセノフォン，プラトン，アリストテレスは，哲学の最も高貴な部分である政治学を際立った仕方で扱った。……近代の哲学者のなかではマキァヴェッリ，ハリントン，ヒューム――過去の経験に学び，また古代人と近代人の双方の統治の運命に教わった――が，哲学のこの部門で強力な進歩を遂げた。しかしながら，最も傑出した大家，モンテスキューはすべての哲学者を遥かに凌駕したように思われる。彼は，国籍はフランス人であるが，性格と熱意においてブリテン人である。歴史の総体を学ぶことから教訓を得たこの人物は，極めて鋭い判断力，古代ギリシア風の知恵，スパルタ人のような簡潔さと重い言葉遣いをもっていたが，法，道徳，政治の原因，原理，影響力を人間本性の最初の発端から最も流暢に展開した。」[30]

ホーコンセンはこのようなカリキュラムの説明を補足するものとして1752年の4ページの「哲学のコースの概要」を紹介している。自然哲学の様々な部門と数学の概要を述べたのち，リードは人間知識の他の大部門すなわち精神を素描した。残りは自然神学，倫理学，経済学，政治学であって，それらは実践倫理学にとって，リードの道徳思想の摂理体系と法による神の支配を明確にするものとして興味深い。「人間精神とその作用，力能の描写（歴史）の次は，神と神の自然支配の知識である。それによって神が生命の無い物質，動物，人間を統治する法。道徳を支配する我々の能力。我々の存在が神の下にあり，現世での我々の状態は来世のための規律と改善の状態であるという示唆。魂の自然的不滅性。」

またリードは「倫理学，経済学，政治学。統治の偉大な道具。知恵に関する意見によって，権利の善性によって得られる権威。勇気，軍事技術，雄弁術」と記している。続いてリードは職業を3段階に区分する。

「あることがらはすべての人間によって達成でき，下層の生活の義務となる。有徳に暮らすこと，神と人に対して善き良心を保つこと，農業，手工業，運送のような真面目な仕事によって家族の生計を立てること。こうした職業を正直に営み，それで利益を得る人びとは社会の有益な構成員である。新しい発明によって職を改善する人びとは名誉と公共の報償に値する。」

「第二に，中流に属する仕事があるが，それはより名誉がある。宗教あるいは教養教育の公的教育者，医師，法律家，裁判官。

第三に，さらに高度なものがある。政治，軍事技術，あるいは雄弁術によって大集団を統治するもの。」

人間本性の特権，あるいはある人の他人に対する主要な卓越，野心の対象となるもの，名誉あるいは他人からの尊敬を要求するもの，ある人を偉大，有益にし，人間大衆から卓越させるものを，リードは二種類のもの，すなわち力と徳に帰着すると言う。「徳はすべての現実の卓越の原理である。力はその手段である。徳は魂であり，精神であるが，力は徳がその目的を成し遂げるための機関である。力は様々な原理を持っており，1.富（最低の種類の力である），2.権威，3.記憶，判断力，知恵，良き振る舞い，4.慎慮，5.働く習慣，技芸の腕前，6.勇気，節度，優しさ，勤勉のような多くの徳は類似した力の種類である。7.雄弁術。」[31]

1758年11月22日にリードはアバディーン協会に報告した論文において「正義は自然的徳か人為的徳か」という問題を提起した。それは『能動的力能』の主題であった。1759年には「人類は道徳に関して常に同じであったか，また現在そうであるか」を問い，1760年には「い

29）Haakonssen, pp. 16-17.

30）Haakonssen, pp. 17-18.

31）Haakonssen, pp. 18-19.

かなる種類の原理も注入せずに子供を教育するのが適切かどうか」を問題にした。1761 年には「道徳的性格は，感情に存するか。その際，意志は関係するか。それとも固定した慣習的で恒常的な目的に存するか」，また 1763 年には「道徳的是認に値するすべての行為は，それが道徳的に善であるということを納得して，必ずなされるのかどうか」を問題にした。この時期には，「適切な法の奨励によって大ブリテンの出生はほぼ倍増可能か，あるいはすくなくとも大幅に増加するか」という人口問題の関心もあった[32]。

3．『人間精神の研究』（1764）

リードはアバディーン時代を締めくくる著作『コモン・センスの原理に基づく人間精神の研究』を 1764 年に刊行した。それは認識論の著作であり，とくに感覚論の著作であった。それは神学的枠組を持っており，認識論的懐疑論を批判しているが，道徳的懐疑論の批判にとってもその批判は重要である。こうしてグラスゴウに移る以前にリードの道徳思想の相当部分が形成されていた。それは道徳の形而上学的・神学的基礎，哲学の方法原理，道徳科学の精神科学への基礎付け，道徳的主体と道徳的判断の概念，ヒュームが代表する道徳的懐疑論の批判，道徳の実践的教科としての道徳哲学教育，キリスト教的・ストア的視座から理解された道徳教育と市民生活の正しい遂行との結合，古典的共和主義，ユートピア，国制主義思想への関心などである。そして自然法学への関心の欠落が特徴的であるが，これはまもなく変化する。

Ⅳ．グラスゴウ時代のリード

1764 年の秋に，リードはグラスゴウ大学の道徳哲学講座に就任した。その講座は，ガーショム・カーマイケル，フランシス・ハチスン，アダム・スミスによって次第に充実させられ，著名な講座となっていた。リードは最強の候補者というわけではなかった。当時のスコットランドでは新任ポストにつくには有力者の恩顧が必要であり，リードも恩顧を必要とした。デクスフォード卿とケイムズ卿が彼を支援した。リードの採用に反対した一人は法学教授のジョン・ミラーであった。スミスの直系の弟子，ミラーは形而上学ではリードの反対側にいて，ヒューム哲学に近かった。政治思想では二人はともに自由主義的ウィッグであったが，その哲学的基礎はまったく相容れなかった[33]。

このように，リードは全員一致で選ばれたわけではないが，同僚の大方はリードを好意的に迎えた。グラスゴウ大学教授となった 1764 年に，リードはグラスゴウの市民・組合員（Burgess and guild brother of Glasgow）となるとともに，グラスゴウ文学協会の会員に選ばれている。彼はすぐに大学の行政に巻き込まれ，図書館の財務委員，バークが学長を務めた 1784 年から翌年には副学長などの諸委員を務め，またスコットランド教会総会の大学代表（およびハイランドと島嶼委員）を二度（1767, 1772）務めている。

しかし，リードは大学の内紛にも巻き込まれた。内紛はこの世紀いっぱい続いたが，それは評議会と学部の間の行政権をめぐる争いであった。リードはだいたい学長リーチマンの主要な対抗者，自然哲学教授ジョン・アンダースンを支持したけれども，アンダースンのような学内政治への情熱を持ち合わせなかったと言われる。リードの関心は政治への関与ではなく，洗練と徳の涵養に向けられていた[34]。

リードは科学を専攻する同僚と交友を深めた。ジョージフ・ブラックの化学の講義には 2 年間出席した。最も重要な交友はケイムズ卿と

32）Haakonssen, p. 20.

33）Haakonssen, pp. 21-22.

34）Haakonssen, p. 22.

の間である。リードは1762年にケイムズと知り合った。リードは彼と形而上学と科学について長い手紙を交換し，家族を伴って夏休みにはケイムズの所領に滞在した。ケイムズはブレア・ドラモンドの館に多数のゲストを招いた。そのなかには，フランクリンやキャサリン・マコーリなどがいた。またリードは「アリストテレス論理学小論」をケイムズの『人間史粗描』［1774］に寄稿したり，ケイムズの草稿を読んだりした[35]。

リードはアバディーンに愛着があり，休日には定期的に再訪し，友人と会った。ジョン・ステュアート，スキーン兄弟，ジョン・グレゴリなどである。若い世代ではジェイムズ・グレゴリとD・ステュアートがいる。ジェイムズ・グレゴリはジョン・グレゴリの息子で，医者であった。医学校の教授などを経て，ウィリアム・カレンの後任としてエディンバラ大学の教授となった。リードは年齢にとらわれず若者を受け入れた。心が広く，知的機敏さ，新思想への情熱を持ち続けた。リードとグレゴリとの関係は実り多い知的交友となった。D・ステュアートは1771年から翌年にかけてリードのもとで学んだ。それはリードを高く評価していたエディンバラの道徳哲学教授アダム・ファーガスンの推薦によるものであった。ステュアートはスコットランド哲学とはコモン・センス学派のことであるというイメージを内外に流布し，フランスと北アメリカに伝えた。彼はまた『リード伝』を書いて，リードが狭い意味の哲学者であるかのように流布した張本人でもあった[36]。

1．文学協会

グラスゴウでのリードの活動の拠点として重要であったのは，グラスゴウ大学の文学協会である。この協会は大学の構成員以外も加わっていた。協会は実践的な時事問題に関心を持っており，とくに商業の中心地となりつつあったグラスゴウの諸問題に深い関心を寄せていた。リードも経済政策に関心があった。1767年にリードは「生活必需品が高騰するのを防止するために国家が用いる最も適切な手段は何か」という問題を文学協会に提出した。1778年には穀物法論争に加わり，輸入穀物の貯蔵禁止によって地主利害に対して商人を擁護する均衡策を提案する論文を出した。「輸出用に外国産穀物あるいは食糧を貯蔵することは，この国の利益にきわめて有害であるか，そして可能なら防止すべきか」，さらに同年には「貨幣の利子は当事者が契約した場合，法によって規制するのが適切か」を論じて，『高利擁護論』におけるベンサムの議論の一部をリードは先取りしていた。リードはまた「摩滅による貨幣の減価の悪影響はどのようなものであるか」も論じた[37]。

35）Haakonssen, p. 23. ケイムズは1740年代まではヒュームの庇護者であり，1750年代にも急進的な思想の持ち主である若きミラーの庇護者であったが，その後，ケイムズは次第に自らの保身のために保守化したように思われる。そのきっかけは『道徳と自然宗教の原理』［1751］にあった。すなわち，決定論に立ち「自由の欺瞞」を説くケイムズの「自由と必然」論が，あまりにも正面から正統なキリスト教信仰を攻撃するものと受け取られ，また理神論的，無神論的と受け取られたために，懐疑論者として有名になっていたヒュームとともに教区と牧師から攻撃を受けたのである。ケイムズは自説を撤回したが，それはおそらくアメリカの福音主義者ジョナサン・エドワーズの『意志の自由の研究』［1754年］におけるケイムズ説への反論への応答であった，とロスは見ている。穏健派が擁護したにもかかわらず，ケイムズは1755年に教会総会の長老席から排除された。もし，自説の間違いを認めて撤回しなければ，ケイムズは裁判官という法曹界での地位も危うくなったかもしれない，とロスは推定している。Ross, I. S., “The Natural Theology of Lord Kames”, in Wood, P. ed., *The Scottish Enlightenment : Essays in Reinterpretation*, University of Rochester Press, 2000, pp. 340, 344-45.

36）Haakonssen, p. 24.

こうした経済問題以外に，リードは1768年4月1日には「社会の始まりに暗黙の契約を想定することは十分な根拠があるか」，1794年11月28日には「ユートピア制度の若干の考察」を論じた。リードはまた協会で，形而上学の諸問題も論じたし，ヒュームの懐疑論批判，プリーストリの唯物論と必然論批判も展開した。道徳理論に関しては，1766年に道徳的性格について，1769年には「道徳的義務の認識は理性によるのか感情によるのか」，1776年には「能動的力能論」，1777年には「理解力と意志を与えられていない存在に能動的力能を帰す理由があるか」，1778年には「人間精神における行為の原理についての論考」を提出した。実践倫理学に関わる報告もしたであろうが，議事録が完全でないので，それ以外については分からない模様である。1795年11月25日には最後の報告「人体の筋肉運動について」を行っている。

リードは各種の人道的な社会改革に支援を行った。グラスゴウの新しい病院，監獄改革，ウィルバーフォースの奴隷貿易反対運動などが知られている[38]。

2．二つの講義

こうした多忙な活動を行っていたが，リードの主要な関心は講義と著作での哲学の仕事にあった。16年間リードは二つの伝統的な授業を行った。10月から翌年の6月にかけて，教養科目のカリキュラムに決められた「公開」授業を，月曜から金曜まで朝の7時半から8時半に行い，11時から12時に同じ授業の試験を行った。時には11月から5月にかけて，人文学の学位規定にない，より上級の授業，「個人」授業を12時から午後の1時まで，週3回，行った。聴講学生の詳細は分からないが，学生たちは10代の最初から始め，繰り返してリードの授業に出て，道徳哲学は4，5年聴いた模様である。

スコットランド教会の牧師になる学生は，まず教養課程をとってから神学に進んだ。神学生，法学生も医学生も少なくとも教養科目のいくつかは学んでから専門に進んだ。それ以外の学生は専門に進まずに課程を終えた。こうした緩やかな制度のもと，授業料収入が教授の収入の多くを占めたので，講義は学生を引き付けなければならなかった。リードの授業は多くの学生が出席した。着任して2年後に，リードは，アダム・スミス以上の学生を教えていると自慢できるようになった。その前年に，より大規模な大学となっていたエディンバラで，ファーガスンはリードの2倍以上の学生を教えていた[39]。

多くの学生は貧しく，授業料は安かった。公開授業は1ギニー半，個人授業は1ギニーで，生活費も安かったので，一年に5ポンドもあれば大学教育を受けられた。中流階級と借地農のための大学教育が可能となっていたのである。リードの時代には，彼らの息子がグラスゴウ大学の学生の多数派であった。非常に貧しい学生は給費生になることができた。神学の授業は無料であったから，貧しい学生にとっての上昇の道は牧師になることであった。学生のほぼ半数が中西部スコットランドから来た。また5分の1はアイルランド出身であった。リードは3分の1がアイルランド出身と見ていたし，ハチスンは彼らを厄介者と見ていた。リードもまたそうで，「教育で最も不快なことは多数の愚かなアイルランドの若者がいることだ」とリードは書いている。

弟子のD・ステュアートはリードの講義をこう記した。「彼の講義と教え方には特段魅力的なものはなかった。彼はメモなしの講義に熱中することもほとんどなければ，読み方も著述したことの効果を増すように考えてもいなかっ

37）Haakonssen, *ibid*.

38）Haakonssen, p. 25.

39）Haakonssen, pp. 26–27.

た。しかしながら，文体は単純で明晰，人柄は重厚で権威があり，彼の教える教義に若い聴講生たちは全般的に関心を持っていたので，彼が教えた多数の聴衆はつねに最高に静粛かつ尊敬を抱いて彼に耳を傾けた。この点について，わたしは1772年の冬学期のかなりの期間，幸運にも彼の学生になった個人的経験から語っている。」

ホーコンセンは，この回想は間違っており，リードは講義を読んで聴かせることはなかったと言う。多くの講義は短いノートしかなく，完全な教科書があった証拠はない。リードの講義は口述調というより対話型であった。「公開」講義より試験の授業のほうが対話型授業に合致していたかもしれない。1765年に卒業して1774年に論理学の講座に就任したジョージ・ジャーディンは，たぶんリードの初年度の講義において，いかに巧みにリードが学生を掌握したかに大いに感心したことを述べている。リードはグラスゴウの初期の個人授業では，まず「人間精神の涵養」を扱い，次に精神と身体の関係，相互の影響を扱い，それから美学・芸術と雄弁術の考察に進んだ。これはまもなく変更された[40]。

個人授業において，リードのような精神哲学を講義することは，グラスゴウ大学では新しいことで，ハチスンは主に古代の道徳論を講義し，スミスは修辞学と文学を扱った。しかし，公開講義の変化のほうが大きかった。カーマイケルの時代から授業の骨格は自然神学と道徳哲学ないし自然法学であり，ハチスン以降は自然神学の比重が小さくなり，政治理論がより重視され独立した部門となった。講義の序説で述べているように，彼の講義は，精神学，倫理学，政治学に分かれている。大体の時間配分は，最重要とされた精神学は10月初旬から3月初旬の6ヶ月，倫理学（実践倫理学）は3月の残りから4月の2ヶ月足らず，政治学は5月から6月の最初の数日にかけての1ヶ月余りであった[41]。

3．精神学・実践倫理学・政治学

精神学は，精神の一般理論，道徳理論（道徳心理学と道徳認識論に相当），自然神学のうちの神的精神の存在と本性に関する部分を含んでいた。伝統的な自然神学の一部であった道徳神学は実践倫理学の冒頭部分，「神に関する義務」を論じる部分となった。伝統的な道徳哲学の大部分は「自分自身への義務」に圧縮され，実践倫理学（規範的倫理学）の残りは「他人への義務」という見出しを持つ自然法学体系として取り扱われている。

第三部の政治学は実践倫理学と峻別された。実践倫理学は規範的で「政治的法学」と呼ぶべき部門である。その対象は「政治的結合から生じる権利と道徳的義務」である。政治学はまったく異なる。「人間がいかに行為すべきかを示すのは政治学の仕事ではない。それは道徳に属す。状況と政府いかんで人はいかに行為するであろうかを示すことである。」しかし，政治学は単なる説明に留まらない。それは伝統的なテクネーである。有能な政治家は，良かれ悪しかれすべての政体の本質と影響力を理解しなければならない。

政治学は2部からなる。最初の最も重要な部分は統治形態，統治構造である。それは第一に，それぞれの統治形態の自然な影響力の分析，第二に，所与の状況で最適の統治形態はどれかの検討からなる。第二部は，「治政」Policeであって，政治社会の繁栄に貢献する従属的な目的を前提し，この目的に寄与する手段も政治学の対象である[42]。

実践倫理学も政治学も書物となって世に出る

40）Haakonssen, pp. 28-29.

41）Haakonssen, p. 30.

42）Haakonssen, pp. 30-31.

ことはなかった。しかし，講義において聴講者に影響を与えたし，リードの全貌を理解するために重要である。実践倫理学でのリードの大発見は，近代的・プロテスタント的・自然法学である。リードはターンブルのもとで自然法学に出会っていたはずであるが，アバディーンでは関心を示した痕跡が無い。初期の実践倫理学も，通例のストア的・キリスト教的・徳論であって，若干の古典共和主義，ユートピア，ウィッグ国制論への関心が見られるものであった。リードにおける伝統的徳論から義務に関する近代的法体系への移行は，大きな農村の中心から大商業の中心への移動と並行しており，エディンバラの法律家の法への関心はないのである。

自然法学の発見はリードの思想に大きな変化をもたらさざるを得なかった。開講の辞においてリードは聴講者に前任者のスミスの講義ノートを持っていないか尋ねている。2ヶ月の自然法（実践倫理学の一部）の講義の準備に不安があったのかもしれない。自然法学はスミスの講義の中心主題であった。初年度の講義で，リードは「神への義務」も「自分自身への義務」も体系的に扱うことができなかった。また「国家の権利と義務」も扱いはしたが，おざなりであった。法学の部分ではハチスンのテクストに依存せざるを得なかった。リードは自然法学を習得し，実践倫理学の体系に組み込んだ。1760年代の末までにリードはハチスンとプーフェンドルフから継承した線上で自らの実践倫理学を完成した[43]。

V．晩年のリードと後世への影響

ホーコンセンは『実践倫理学』を編集して刊行した。その元になったリードの草稿はアバディーン大学図書館のバークウッド・コレクションのものである。これは500点の膨大な草稿からなっているが，多くはグラスゴウ大学時代のもので，ホーコンセンは1765年から1771年にかけて書かれた草稿から，『実践倫理学』のテクストを編集した。今日，われわれはこのテクストを使って，リードの実践倫理学の概要を理解できる。しかし，今も昔も，講義というものは，伝統の継承を避けられない。リードもまた自然法学の伝統を継承している。大学の講義は，伝えられた伝統遺産の批判的継承と講師の独創的（それは独断的ということではない）学問的成果を聴講者に伝えるという役割を持っている。大学の講義はそれなりの制約を余儀なくされるものである。教授はすべてを自分の独創で講義することはできないし，また実際にそうすることはない。したがって，研究者は，講述された思想の何が継承で，何が独創かを明らかにしなければならない。

リードは1775年から76年にかけて，プリーストリが編集したデイヴィッド・ハートリ『人間論』についての匿名の書評を『マンスリー・レヴュー』に発表した。1777年には，リードの娘マーサがガーショム・カーマイケルの息子，パトリック・カーマイケルと結婚した。そしてリードは1780年に70歳で引退した。後継者は彼の助手を務めたアーチボールド・アーサー（Archibald Arthur）であった。

リードにはハチスンのようなカリスマもなければ，ミラーのような民衆性もなかったが，教師として尊敬され成功した。聴衆も授業料収入も漸増していった。リードは豊かになり，自由財産の擁護論を実践して，寛大さと慈善を実践した。家族の出費もあまりかからなかった。たくさん生まれた子供は一人しか成人しなかった。70歳でなぜ引退したのかは分からない。耳が遠くなっていったことも理由かもしれない。自らの哲学体系を完成したかったのかもしれない。1783年に「エディンバラ王立協会」の会員に選ばれ，文芸部会の委員となる。1784年には前述のようにバークによって副学長に任命

43）Haakonssen, pp. 32–33.

された。75歳になった1785年に『人間の知的力能論』が出版され，その3年後には『人間の能動的力能論』が出版された。概して好評のうちに迎えられた[44]。

リードは，1790年には「スコットランド教会牧師のグラスゴウ協会」の創立に参加し，初代会長になった。翌年の1791年にリードは「グラスゴウ自由の友」に加わり，バスティーユ記念日夕食会に出席した。1792年には「国民議会」に醵金をしている。このようにリードは，この段階ではフランス革命を支持していた模様である。なぜ，リードはフランス革命を支持したのか。それは革命がフランス国民の幸福を増大させると思ったからであるに違いない。リードは，そもそも過度な階級格差を是認しなかった。バークの支持者であったと言っても，フランス革命までのバークは穏健な改革派であったから，リードの保守主義というのは自然神学的な意味と，ミラーとの比較でそう言えるに過ぎない。

1789年にオーグルヴィへの手紙で，リードはこう述べている。「人々は自由の観念において次第に進歩してきているように思われる。だから同じように所有権（propert）の観念でもそうあってほしいものです。しかし，この地球上は他人を排除して少数者が独占しているのは当然であるけれども，知的な世界は常に共有であり，最大の分け前を持っている人は，それを改善する意欲を持った人にいっそう即座に分け与えて欲しいとわたしは願っている。」[45]

アバディーンでのリードの同僚で後継者であったウィリアム・オーグルヴィは1781年に『土地所有権論』を刊行した。それは自然法との関連，ヨーロッパ諸国の現行法との関連で，土地所有権を論じると共に，下層階級の利益になるように土地の再配分を主張するものであった。それはトマス・スペンスのきわめて急進的な土地平等配分論に比べると，なお穏健であるが，リードは影響を受けていたのかもしれない[46]。リードは現状の所有の不平等に批判的であった[47]。しかし，私有財産をリードは基本的に支持していた。共有のユートピアを考察してメリットも認めたものの，ユートピア社会に住むことは神の意図ではないとして，結論としてユートピアを退けた[48]。しかし，それは望ましい方向への階級社会の改革を排除するものではなかった。この点は，所有権論，限嗣相続批判などとともに，詳細に検討する必要があるだろう。

1790年には妻のエリザベスに続いて，娘婿のパトリックも他界した。生まれた多くの子供を天然痘などで次々に失った老リードの孤独感は，これによってますます深まったであろう。

いったんはフランス革命を支持したリードであるが，1794年には「政治的革新の危険性の考察」を『グラスゴウ・クーリエ』に発表した。それはフランス革命のような急激な変革を否定するものである。弟子のD・ステュアートやマッキントッシュなど大多数のスコットランドの知識人が，リードと同じようにいったんはフランス革命を支持したが，やがて革命の意図を超えた政治力学の帰結である，ジャコバン独裁とテルミドールの反動に幻滅し，革命そのものとその影響の大ブリテンへの波及に敵対するようになった。

1．後世のリード

一世代のうちにD・ステュアートの著作によって，またジェイムズ・ビーティとジェイム

44）Haakonssen, pp. 33–34.

45）*Correspondence*, p. 294.

46）ホーコンセンは影響を受けたと理解している。*Practical Ethics*, p. 445.

47）*Practical Ethics*, p. 286.

48）*Practical Ethics*, p. 298.

ズ・オズワルドの貢献もあって，コモン・センス哲学のスコットランド学派という概念が生まれるに至った。

18 世紀は決してコモン・センス学派の時代ではない。マコッシュの『スコットランド哲学』［1875］を読むと，コモン・センスの分析哲学がリードの『人間精神の研究』［1764］以降，スコットランド哲学を支配したかのように思われるかもしれないが，ことはそう単純ではなかった。この点については，世紀の終わり頃にますます哲学から科学へという思想の力点移動があったと見ているリチャード・シャーの見解が説得的である[49]。シャーによれば，リードの『人間精神の研究』以後の主なコモン・センス哲学への貢献はビーティと，オズワルドの粗雑な努力に留まった。リードは論敵ヒュームから経験的・科学的方法を習得し，それをヒュームに向けたのであるが，彼らは懐疑論批判に力点を置き，経験的研究を前進させることはなかった。

確かにビーティの本は人気があったが，しかし，短命で，ヘイルズ卿（Lord Hailes）を別としてエディンバラではあまり評価されず，むしろロンドンの名士の間で読まれた。ビーティのヒューム批判『真理論』は 1770 年に出版され，74 年まで毎年版を重ね，1776 年に第 6 版を出している。また『論集』は 1776 年に刊行され，77 年，78 年と版を重ねたが，18 世紀の大ブリテンでは，それ以上は印刷されなかった。1773 年にアレグザンダー・キンケイド（Alexander Kincaid）の事業を継承したエディンバラの出版者，クリーチ（William Creech, 1745–1815）の書店はエディンバラの思想家のたまり場でもあり，彼自身がスミスやバーンズ，ブレアの本を出版したが，ビーティの『論集』も出版した。彼は初版の 800 部のうちの 4 分の 3 をロンドンに送り，15 パーセントをエディンバラでの販売に取っておいた。イングランドの予約者はビーティの友人のニューヘイヴン卿（Lord Newhaven）やモンタギュ夫人などであった。

1774 年にジョージフ・プリーストリが『リード博士の『研究』……ビーティ博士の『真理論』……オズワルド博士の『訴え』……の検討』において，3 人をスコットランド哲学の悪しき新学派として激しく攻撃した。それを読んだビーティは息巻き，リードとケイムズは嘲笑したが，スコットランドにおけるコモン・センス学派の将来は疑わしかった。リードは大学の講義で聴講者こそ多かったものの，ハチスンやスミスほどの多くの信奉者を集めたことがなく，エディンバラの知的世界との関係もケイムズ卿との関係以外は微々たるものであった。この時期にはベンヴィ（Benvie）の牧師であり，後にエディンバラ大学の自然哲学の教授となるジョン・プレイフェア（John Playfair, 1748–1819）のように，エディンバラの知識人のなかにはコモン・センス哲学を疑わしい，軽蔑すべきもので，アバディーンの逸脱とみなすものがいた。ただし，彼はリードだけには哲学があるとして区別している[50]。

しかし，1785 年に「コモン・センス革命」が起こった。この年に，リードは『人間の知的力能論』を刊行し，3 年後に『人間の能動的力能論』を刊行した。この二つは，コモン・センス哲学が単なるヒューム懐疑論の論駁に留まらず，学問的・科学的研究方法であることを主張する重厚な論集であった。他方，この年に始まるエディンバラ大学の道徳哲学の講義（1785–1810）で，D・ステュアートがコモン・センス哲学を普及し始めた。その意図は，リードの複雑な形而上学に光を当て，明確化し，洗練し，体系化することによって，実際の生活に

49）Sher, R., *Church and Universities in the Scottish Enlightenment*, Edinburgh University Press, 1985, pp. 311–14.

50）Sher, pp. 311–312.

応用できるものにすることであった[51]。講座の前任者アダム・ファーガスンと同じように，ステュアートはストア的キリスト教的な徳とウィッグ保守主義のイデオロギーを熱心に講じた。

けれどもステュアートの力点は，ファーガスンが重視しなかったスミスの経済学とリードの精神科学へとますます向かって行った。弟子の後継者，トマス・ブラウンもその後のサー・ウィリアム・ハミルトンもますます分析的な精神科学の確立を目指した。こうして19世紀になると「スコットランド哲学」は，ハチスンやファーガスンの広範で，人文主義的で，規範的な道徳哲学ではなく，リードとステュアートに結び付いた分析的な心理学，認識論，形而上学の研究を意味するものとなった。

伝統的なスコットランドの道徳哲学の教育目標は有徳なキリスト教徒紳士，良きブリテン市民の訓育に置かれていたが，分析的精神哲学はこうした目標を消滅させる危険性があった。穏健派牧師は1780年代からますます科学に関心を示すようになった。グリンフィールド（William Greefield），プレイフェア（John Playfair），ウォーカー（John Walker）などがそうである。こうした傾向の結果として，思想界における牧師と法律家の地位の逆転が起こる。それはスコットランドの思想史の目だった特長の一つである。

従来，スコットランド啓蒙思想史において法律家の地位が過大に評価されてきたが，知的エリートであった法律家は啓蒙の盛期においては必ずしも学問共和国の主人ではなかった。しかし，ヘンリ・マッケンジーとジョン・ミラーを嚆矢として，そのような時代が始まる。マッケンジー流の法と文芸の結合は，「ウェイヴァリ・ノーヴェル」のウォルター・スコット，やがてロバート・ルイス・スティーヴンスンへと受け継がれる。ミラーの法とウィッグ主義の結合は，19世紀のスコットランドにおいてあまたの知識人の輩出に受け継がれた。スコット，ジェフリ，ブルアム，後期のスティーヴンスン，ホーナー，ネイピア，マッキントッシュ，彼の義理の息子で東洋学者のアースキン，コバーン，トマス・トムスン，マルコム・レイング，コスモ・インズなどなど[52]。

推測的歴史，哲学的歴史も古事学的歴史，準ロマン主義様式に変わる。18世紀のスコットランドは歴史の国民であることを誇示した。異なる文化，制度の比較と発展の概念を組み合わせた推測的歴史と，それと重なるけれども，個々の国民，場所，時代の説明を組み込んだ物語的・哲学的歴史の二種類が際立っていた。前者は牧師（ロバートスン，ファーガスン，ブレア，ジョン・ローガンなど）と法律家（ケイムズ，ミラー，サー・ジョン・ダルリンプル，ギルバート・ステュアートなど）およびスミスによって描かれた。後者は，当時はより一般的であったが，大部分穏健派に属する長老派牧師とデイヴィッド・ヒュームが遂行した。ロバート・ヘンリ，ロバート・ワトスン，ファーガスン，ロバートスンはそのような歴史を書いた。しかし，このような歴史は19世紀には流行らなくなる。歴史家の関心が変化し，稀少な資料，記録，草稿，一次資料への関心が際立ってくる[53]。

したがって，モデレート知識人も没落するが，リードが影響力を発揮するのは，モデレートであったからではなく，まさに分析的な人間哲学の創始者としてであった。コモン・センスの哲学的分析は科学の時代精神に合致していた。

51）Phillipson, N., “The Pursuit of Virtue in Scottish University Education: Dugald Stewart and Scottish Moral Philosophy”, in *Universities, Society and the Future*, ed. Phillipson, N., Edinburgh University Press, 1983. pp. 82-102.

52）Sher, p. 315.

53）Sher, p. 317.

こうして，19 世紀には，スコットランド哲学の総帥としてのリードの地位は安泰であった。ウィリアム・ヒューエルやヘンリ・シジウィックはリードの見解を真面目に取り上げたし，ミルは『ウィリアム・ハミルトンの哲学』〔1865〕を書いて再評価した。ミルは経験主義と直覚主義に分けた。イングランドとスコットランドの哲学が融合した 20 世紀には，リードはＧ・Ｅ・ムーアなどの著作で生き延びている。

ブリテン以外にはリードは北アメリカで影響力を発揮した。リードの著作はＤ・ステュアートの著作とともに，教科書として利用され，19 世紀には哲学とコモン・センスは同義にまでなった。リードはチャールズ・パースのプラグマティズムにも影響を与えた。19 世紀のフランスへのリードの影響が重要であったことはよく知られているが，ドイツへの影響は他のコモン・センス学派の哲学者の影響とともに，最近になってようやく明らかになってきたに過ぎない。資料集も含めて関連の書物はたくさん出ているが，リードとコモン・センス学派の影響に関しては，まだ全般的な研究はない[54]。

こうした後世でのリードの影響，リード理解において失われたものは，リードがすべての人間の知識の間に見ていた相互関連の展望である。そもそもリードの二つの論集は広範囲にわたっているものの，そうした展望を伝えていない。またリードの科学への関心自体は今では研究もあって知られている事実であるが[55]，その意義は必ずしも明らかでない。自然哲学と精神哲学の一体性というリードの思想は，草稿を見ることによってしか把握できない。実践倫理学は『能動的力能論』の短い 3 章にその片鱗を見せてはいるものの，講義で行った全貌は教えない。

二大著作を刊行して後も，政治と政治学――とくにフランス革命の勃発後――，グラスゴウ文学協会，手紙の交換などに，リードは多忙であった。リードはシンクレアの『スコットランド統計』に協力して，『グラスゴウ大学の統計的説明』を刊行した（おそらく 1794 年に執筆され，1799 年刊行の第 21 巻に収録された）。

リードは論敵のヒュームと同じくユーモアと皮肉を得意とし，それが学究のキリスト教的ストア主義を明るくした。妻と死別した 1792 年のＤ・ステュアートへの手紙に書いた。「わたしは歩けるし，読書も楽しんでいるが，すぐに忘れる。一人となら会話もできる。はっきり話してくれ，左耳の 30 センチ以内でなら。教会にも行くが，何が言われているか一言も聞こえない。いいかね，わたしは元気だと言いたいのではない。しかし，まだわたしは無気力とけだるさ（アンニュイ）を免れておるのだよ。」カーマイケルの息子と結婚した娘のカーマイケル夫人に世話されながら，リードは最後までガーデニングを楽しみ，高等数学を研究しつつ，一度は快哉を叫んだフランス革命が悲劇に終りつつあった 1796 年 10 月 7 日に，他界した[56]。

54）Haakonssen, p. 34.

55）長尾，前掲書など。

56）Haakonssen, pp. 35–37.